太宰治『裸川』論
――〈うがち〉で開かれる／閉じられる物語――

A study of Dazai Osamu's "Hadaka Gawa"

The Stories created/ended by "Ugachi"

*舘下徹志
Tetsushi TATESHITA

はじめに

太宰治の『新釈諸国噺』は、昭和二十（一九四五）年一月、生活社から刊行された。「終戦前、太宰の著書の中で、一番版を重ねた」[1]とされるこの小説集には、井原西鶴の浮世草子を着想の原点とする翻案作品が十二編収められている。その典拠として示された西鶴の著作は十一編を数える。西鶴を「世界で一ばん偉い作家」と称えた太宰治は、「それにまつはる私の空想を自由に書き綴つたと「凡例」で述べる。[2]本稿が取り上げる『裸川』（『新潮』41-10 昭和19・10 初出本文の題名は『新釈諸国噺』）は太宰が「まづ手はじめに、武家義理物語の中の「我が物ゆゑに裸川」の題材を拝借して、私の小説を書き綴つ」た短編小説である。

『武家義理物語』（貞享五・一六八八年）は、前年に出版された『武家伝来記』に続いて井原西鶴が創作した「武家物」の浮世草子であった。その巻頭に置かれた『我物ゆゑに裸川』（以下、『武家義理物語』底本の表記による）は、『太平記』に「青砥左衛門」の名で登場する人物の逸話に材を採り、原話の教訓性は保ちつつも脇役を加えて筋立てに起伏を与えた虚構作品である。巻一「目録」の「見出し」には、「一文惜みの百しらず　夜のたいまつは心の光」とある。[3]

「青砥左衛門」は鎌倉幕府の執権、北条時宗・貞時に仕えた引付衆のひとりであった、と『太平記』には語られている。この軍記物語が描く「当代」から見て「『先代』の『威力あれども驕ら』ぬ善政が回顧される」にあたって引かれた「先例説話」の登場人物である。[4]しかし、現在のところ「青砥左衛門」が実在したことを証明する確かな史料はなく、「儒教的な政治道徳の体現者として伝説化された人物」[5]であろうと考えられる。そのいくつかの伝説の中で最も広く知られているのが、鎌倉を流れる滑川を舞台とした逸話にほかならない。

その逸話は、「賢才」[6]・青砥藤綱の高邁な経済理念を示すものとしてあった。ある日のこと、「夜に入て出仕しける」青砥は滑川を渡る途中、誤って火打ち袋から銭十文を川中に落としてしまった。ただ、少額でもありそのまま捨て置くべきところを、青砥は「以外に周章て」町家に人を走らせ、五十文で「続松」十把を買い、「是を燃して、遂に」川底の十文をすべて拾わせたという。後日、「小利大損」の愚かしさをあざ笑う者に向かって青砥は「眉を顰て」こう語った。「彼此六十文の銭一をも失はず、豈天下の利に非ずや」。青砥自身の損失よりも「天下の利」の方にこそ目を開け、と説いたのである。かくて、「難じて笑つる傍の人々」は「舌を掉てぞ感じける」と、驚嘆するほかなかった。以上が『太平記』に載るこの逸話の大略である。

これまで『裸川』はその戯画化の方法をめぐって論じられることが多かった。[7]青砥藤綱という伝説的な理想人物の、理想とは掛け離れた形象に目を向け、『我物ゆゑに裸川』や『太平記』巻第三十五「北野通夜物語事附青砥左衛門事」の本文との比較をとおして、太宰治の創作方法を分析しようとしてきたのである。そこでは、戯画化がもたらす効果や作品の主題、創作意図が問われることになる。[8]

だが、太宰治は『武家義理物語』および『太平記』だけを典拠として『裸川』を書いたのではない。そこには、『徒然草』や『北条九代記』、またはそれらを通俗的に書き換えた諸テクストから、青砥藤綱の周辺に集められた逸話の数数に着目した痕跡が見られる。それゆえ、『太平記』以来さまざまな形で語り継がれ、定型化した青砥藤綱をめぐる逸話の特徴を今一度検証した上で、『裸川』に描かれた青砥像を見直す必要があるのではなかろうか。本論ではその再考の後、作品世界にちりばめられた〈笑い〉の内実を掘り下げてみたい。

*釧路高専一般教育科（国語）

一

江戸時代、「滑川」の逸話は西鶴の『武家義理物語』をはじめとして、多くの文芸や芸能の素材となったばかりか、何らかの〈道〉を説くことをめあてとする書物においてもしばしば引用された。たとえば、「天下の費をいとひ、私の利を忘れたり。倹の道なり」(西川如見『町人嚢』享保四・一七一九年)と、「吝惜」とは似て非なる「青砥左衛門のこゝろ」[9]は高く評価され、「道理においてすべき所を考」えて実践された、「抜群の見識なくてはなるまじき事」[10](室鳩巣『駿台雑話』享保十七・一七三二年)と絶讃される。また、石田梅岩は『都鄙問答』(元文四・一七三九年)「商人の道を問の段」で、「欲心なくして一銭の費を惜み、青戸(ママ)左衛門が五拾銭を散して、十銭を天下の為に惜まれし心を味ふべし」と、「天下公の倹約」と「天命」との両者に「合ふて福を得」る道理を教示する。「信なるかなこの一条は、わきて世の人口実みて、三尺の童子も滑河といふときは、必ず青砥が故事あるよしを知れり」[12]と、曲亭馬琴が『青砥藤綱摸稜案』の前集(文化八・一八一一年)「青砥左衛門尉藤綱伝」に書いたように、当時の人々にとっては常識と化した教訓譚であった。

『裸川』はこの「滑川」の逸話のみならず、青砥藤綱について語られてきた諸々の先行言説をその紙背に抱えざるを得ない。『太平記』以来、青砥は一時期の北条氏による「仁政」を象徴する伝説の主人公でありつづけた。虚構とはいえ、その魅力溢れる人物像に惹き寄せられるごとく、「引付衆」という訴訟・裁判に関わる職務に関連した活躍も語られるようになる。恋川春町『高慢斉行脚日記』(安永五・一七七六年)や山東京伝『玉磨青砥銭』(寛政二・一七九〇年)といった黄表紙に颯爽と登場する青砥藤綱は、公平無私な名奉行として毅然とした態度を保ち、作品世界の多分に道理から遠く外れた騒動にも真摯に向き合い、非の打ちどころのない裁定を下す。そのため、青砥が発する理にかなった簡潔な言葉はきまって、文芸内に出来した混沌とした状況に秩序や平安をもたらすことになる。曲亭馬琴の『青砥藤綱摸稜案』はそうした青砥の名奉行ぶりを具に描いた〈裁判もの〉の読本であった。『弁天小僧』や『白浪五人男』の別名でも知られる歌舞伎の演目、河竹黙阿弥による『青砥稿花紅彩画』(文久二・一八六二年)の大詰めで「義賊」日本駄右衛門が語るように、想念上の青砥藤綱は常に、「仁愛深き」「天下の賢者」[13]でなければならなかったのである。それでは、このような完全無欠ともいえる〈青砥藤綱〉像をふまえた上で、『裸川』の世界へと分け入ることにしよう。

> 鎌倉山の秋の夕ぐれをいそぎ、青砥左衛門尉藤綱、駒をあゆませて滑川を渡り、川の真中に於いて、いささか用の事ありて腰の火打袋を取出し、袋の口をあけた途端に袋の中の銭十文ばかり、ちやぼりと川浪にこぼれ落ちた。青砥、はつと顔色を変へ、駒をとどめて猫脊になり、川底までも射透さんと稲妻の如く眼を光らせて川の面を凝視したが、潺湲たる清流は夕陽を受けて照りかがやき、瞬時も休むことなく動き騒ぎ躍り、とても川底まで見透す事は出来なかつた。青砥左衛門尉藤綱は、馬上に於いて身悶えした。川を渡る時には、いかなる用があらうとも火打袋の口をあけてはならぬと子々孫々に伝へて家憲にしようと思つた。どうにも諦め切れぬのである。

『裸川』の書き出しである。『武家義理物語』の表現をそのまま生かした箇所に傍線を施した。発端の設定は明らかに従来の「滑川」伝説のそれを踏襲している。たとえ、『我物ゆゑに裸川』の内容に触れたことがなかったとしても、「青砥左衛門尉藤綱」、「滑川」という言葉の連なりは、発表当時の読者に既知の話型を想起させたに違いない。『太平記』では「以外に周章て」と銭を落とした青砥の甚だしい狼狽ぶりを描き、それによって謹直な人柄を暗示するが、西鶴はその一句にはこだわらなかった。青砥の動揺には言及することなく、「里人をまねき、僅かの銭を三貫文あたへて是をたづねさせけるに」と、落とした「十銭にたらざる」金額とは不釣り合いな「三貫文」、つまり三千文を費やしての捜索へと語りを進める。一般的な「滑川」伝説における「五十文」とは桁違いな出費に、青砥の執着の深さを代弁させる演出であろう。

したがって、『裸川』は『武家義理物語』よりもむしろ『太平記』に近い眼差しで青砥の生真面目な対応ぶりを精細に対象化していることにはなる。語り手は、「銭十文ばかり」を落としたことに慌てふためいて、奇矯ともいえる言動を繰り返す主人公を批評的に捉える。しかし、その捉え方にはすでに、青砥の謹直な内面をうがつ戯画化が施されていた。冗談以外の目的で、「川を渡る時には、いかなる用があらうとも火打袋の口をあけてはならぬ」などという文言が「家憲」に書き込まれることはなかろう。「惨めにしよげかへり、深い溜息をつき、うなだれて駒をすすめた」青砥は、不測の事態にうろたえ、落胆し

ていたとはいえ、その情動の起伏はあまりにも激しいといわねばなるまい。この小説の「青砥左衛門尉藤綱」は冒頭から、『太平記』以降形成された定型的な青砥像からのずれを演じはじめていたのである。

青砥はこのあと、「たとへ地を裂き、地軸を破り、龍宮までも是非にたづねて取返さん」と心に誓う。その比喩は、「地軸を破り」を除いて西鶴独自の表現を引き継ぐものだった。「龍宮」は海底だけではなく、湖沼や河川の水底にもあると考えられていた。滑川の水底をどこまでも捜索しようというのである。『武家義理物語』の叙述は「国土の重宝朽ちなん事本意無し」という青砥の一念を投影するものであり、草子地のように語り手が批評的に介入する余地はない。ところが、『裸川』の語り手はこの比喩に、「ひどい決意を固めてしまった」と冷ややかな感想を添えるのであった。[14]『裸川』の青砥は全編にわたって、過剰であることのおかしさを振り撒きつづけ、その都度、語り手から冷評される。

二

一旦、滑川の場面を離れた語り手は、「けれども青砥は、決して卑しい守銭奴ではない。質素倹約、清廉潔白の官吏である」と、一転して主人公の名誉回復を図るかに見える。もっとも、「質素倹約、清廉潔白」という評価自体は従来の〈青砥藤綱〉像に何ら付け加えるところはなかった。そうした〈常識〉の再確認に続いて、いくつかの書物が伝える逸話の書き換えによってその人となりが具体的に述べられていく。まず粗衣粗食の実践例が挙げられた後、話題は主従関係へと移る。研究史上、これまで取り上げられることが少なかったこの箇所にこそ、太宰の創作方法の特質を見ることができる。

主人の北条時頼も、見るに見かねて、

「おい、青砥。少し給料をましてやらうか。お前の給料をもつとよくするやうにと夢のお告げがありました。」と言つたら、青砥はふくれて、

「夢のお告げなんて、あてになるものぢやありません。そのうちに、藤綱の首を斬れといふお告げがあつたら、あなたはどうします。きつと私を斬る気でせう。」と妙な理窟を言つて、加俸を断つた。欲の無い人である。給料があまつたら、それを近所の貧乏な人たちに全部わけてやつてしまふ。だから近所の貧乏人たちは、なまけてばかりゐて、鯛の塩焼などを食べてゐるくらゐであつた。決して吝嗇な人ではないのである。国のために質素倹約を率先躬行してゐたわけなのである。主人の時頼といふひともまた、その母の松下禅尼から障子の切り張りを教へられて育つただけの事はあつて、酒のさかなは味噌ときめてゐるほど、なかなか、しまつのいいひとであつたから、この主従二人は気が合つた。そもそもこの青砥左衛門尉藤綱を抜擢して引付衆にしてやつたのは、時頼である。青砥が浪々の身で、牛を叡鳴り、その逸事が時頼の耳にはひり、それは面白い男だといふ事になつて引付衆にぬきんでられたのである。すなはち、川の中で小便をしてゐる牛を見て青砥は怒り、

「さてさて、たはけた牛ではある。川に小便をするとは、もつたいない。むだである。畑にしたなら、よい肥料になるものを。」と地団駄踏んで叫喚したといふ。

真面目な人なのである。銭十一文を川に落して龍宮までもと力むのも、無理のない事である。

「夢のお告げ」の非合理性を理由に加俸を断る青砥の逸話は、『太平記』に語られていた。時宗・貞時のいずれかの「相模守」が鶴岡八幡宮に「通夜し給ける暁、夢に衣冠正しくしたる老翁一人枕に立て『政道を直くして、世を久く保たんと思はゞ、心私なく理に暗からざる青砥左衛門を賞翫すべし』と」、青砥のさらなる重用を勧めた。そこで「相模守」は「近国の大庄八箇所、自筆に補任を書て」、青砥に渡す。しかし、「三万貫に及ぶ」思いがけないその加俸の理由が「夢想」によるものと知った青砥は、「顔を掉て」これを峻拒した。夢など「物の定相なき喩」として「金剛経にも説れ」る幻にすぎない。いつの日か、「若某が首を刎ねよと云夢を御覧ぜられ候はば、咎無くとも夢のごとく行はれ候はんずる歟」。そもそも確かな根拠もなく分不相応な報酬を受けることは、「是に過たる国賊や候べき」と、ある古態本によれば「涙の中に忿つて」、「補任」を返上したという。権力を持つ者の道理に合わない決断を戒める真っ当な諫言といえよう。少なくとも、『裸川』の語りのように「妙な理窟」といなすことははばかられるだけの論理性は十分にある。「欲の無い人」が「妙な理窟」を持ち出し、せっかくの加俸を断ったという俗化に向かう読み換えは、『太平記』以来説かれてきた清廉な家臣・青砥による諫言の価値を意図的に貶めることになる。それは同時に、「政道」に関する道義の重々し

さを捨象して、世俗的な軽みに転じる効果をもたらす。

「欲の無い」ことの例示にも周到な皮肉が込められていた。俸給の残金を分け与えた結果、「近所の貧乏人たちは、なまけてばかりゐて、鯛の塩焼などを食べてゐる」というのでは、青砥の施しがかえって彼らを甘やかし、勤勉に生きることを妨げていることになってしまう。『太平記』の語り手が称賛する、「飢たる乞食、疲たる訴訟人などを見ては、分に随ひ品に依て、米銭絹布の類を与ければ、仏菩薩の悲願に均き慈悲にてぞ有ける」という、相手の置かれた状況に応じた程よい援助が『裸川』の青砥にはできない。無欲を貫こうとの思いが余り、またはその思いばかりが先行して度を超した振る舞いに及んでしまうのである。だが、その不器用さ、不完全さが青砥藤綱という伝説の賢者に生身の人間の現実感を与えていることも忘れてはならないだろう。どこにも破綻のない聖人の枠組みを逸脱するところに『裸川』の青砥は形象され、「智慧の浅瀬を渡る下々の心」との接点が設けられる。

松下禅尼、北条時頼の逸話を紹介するにあたっても、『裸川』の語り手は原典である『徒然草』の表現を素直に引用しようとはしない。兼好が『徒然草』でゆかしい過去の事蹟として伝えるのは、障子の補修を手ずから行い、その倹約の姿を年若くして執権となった我が子時頼に見せることにより、「物は破れたる所ばかりを修理して用ゐる事ぞ」ということを「心づけ」、権力者しての奢りを未然に戒めた松下禅尼の思慮深さであり（第百八十四段）、夜更けの酒席ゆえ、「小土器に味噌の少し附きたる」ものでも酒の肴として「事足りなん」と言い、「心よく数献に及」んだ時頼の寡欲で飾らぬ人柄であった（第二百十五段）。[15] それを『裸川』のように、母から「障子の切り張りを教へられて育つた」時頼はその教えのとおり「酒のさかなは味噌ときめてゐる」と決めつけるのは極論にほかならず、「なかなか、しまつのいいひとであつたから」と簡単にまとめてしまったのでは、これらの逸話の本質を掬い上げることはできない。『裸川』の語り手は、『徒然草』の叙述に込められた本義をはぐらかす手法によって青砥藤綱をめぐる逸話を矮小化し、倹約というよりはむしろ吝嗇に近い、極端なまでの節倹の実践者を青砥に演じさせようとしているのだろう。作中、青砥は三たび熱心に銭を勘定する。これもそうした役柄との親和性をもたらす仕掛けとなっていよう。かかる金銭への執着は、人足たちを雇うための金を「三両出しかけて一両ひつこめ、少し考へて、うむと首肯き、またその一両を出して、やつぱり三両を里人に手渡し」た青砥の逡巡にも見られる。

時頼によって「引付衆にぬきんでられた」経緯をめぐる「逸事」もまた、そのような一連の矮小化の例といえる。これまでの研究では明証されることがなかったが、この一節は、『北条九代記』（延宝三・一六七五年）巻第八「相模守時頼入道政務付青砥左衛門廉直」に基づいて書かれたものと推定される。

相州時頼の三島詣ありけるに、藤綱生年二十八歳忍びて供奉致し、下向道に赴き給ふ所に、人々の雑具共を牛に取付て、鎌倉に帰るとて、片瀬川の川中にてこの牛尿しけるを、藤綱申しけるは、「哀れ己は守殿の御仏事の風情しける牛かな」と打笑ひて通りける。侍共聞付けて、咎問しかば、藤綱申すやう「さればこそ此比数日雨降ず、田畠葉を枯し、諸民飢を悲む所に、この牛尿をせば、田畠の近き所にてもあらで、川中にて捨流しつる事よ。夫鎌倉中に名徳智行の高僧達、貧にして飢に臨む輩いくらもあり、無智破戒の愚僧の金銀に飽満ちたるも多くあり。然るに去ぬる春の御仏事には、破戒無智の富僧計を召して御供養ありて、実に仏法を修学し、持戒高徳の名僧をば供養なし。この御仏事は慈悲の作善にはあらで、只名聞の有様なり」とぞ語りける。[16]

青砥藤綱が鎌倉幕府第五代執権・北条時頼に仕えて功があったことは、『弘長記』（成立年代未詳）や『北条九代記』が伝えるところである。『太平記』に記された活躍の時代を、時宗からその父である時頼の治世まで一代遡らせた意図はわからない。しかし、民衆の生活を安定させる「撫民」を執政の目標としたとされる時頼にふさわしい補佐役として、青砥藤綱が早くから「仁政」を支えたとする見方に違和を覚える者は少なかったのだろう。謡曲『鉢の木』・『藤栄』などに描かれた時頼の「廻国」も青砥の発案によるものと考えれば、為政者と民との隔たりに不正や汚職の原因を見抜いた賢臣の功績として理解できる。物語の叙述と歴史的事実との不整合性をここでは問わないことにする。[17]

時頼が青砥に「政道の器量」を見出すきっかけとなったのは、「三島詣」からの帰途、川中で「尿しける」牛を見て青砥が不意に洩らした一言であった。これではまるで「守殿」すなわち時頼公が主催なさった「去ぬる春の御仏事」のようではないか。雨不足に苦しむ人々をよそに、田畠にではなく川中に放尿

する牛と、鎌倉には徳高くとも貧に苦しむ僧侶があまたいるのに、わざわざ金に飽いた無智な破戒僧を招いて、慈悲の心にも背く「御仏事」を催すこととはよく似ている。「藤綱生年二十八歳」、歯に衣着せぬ痛快な物言いである。近臣の「二階堂信濃入道」からこの発言を伝え聞いた時頼は、「実も彼の者が申す所、道理至極せり」と首肯し、「この事を予て分別せざりけるは、我が大なる誤なり」と自らの非を認め、藤綱を召し出し、「今より後は当家に奉公せよ」と命じた、とされる。

ここでも『裸川』における先行言説の矮小化という手法は顕著である。牛に向かって、「川に小便をするとは、もつたいない。むだである」と「地団駄踏んで叫喚した」だけならば、有用なものを台無しにすることへの怒りを噴出させたにすぎない。それでは、「政道」のあり方にまで踏み込んだ青砥藤綱の直言の意義は大幅に減殺されることになる。牛のふるまいはたとえであって、その粗相を咎めることが直言の主旨ではないからである。

青砥の人柄を描くために参照されたテクストはいずれも、その柱となる理念を骨抜きにされていることがわかる。この小説の語りにとって都合のよい極論化や曲解、省略が随所に見られる。その結果、『裸川』の青砥左衛門尉藤綱は、「妙な理窟を言つて、加俸を断」る偏屈なまでに「欲の無い人」であり、「なかなか、しまつのいいひと」である「主人の時頼」と同じく、「国のために質素倹約を率先躬行」する「真面目な人」という枠内に収まることになる。

先行言説が表象する〈青砥藤綱〉との偏差は、思慮深さという一点に現れている。過度の慈善によって「近所の貧乏人たち」を甘やかし増長させてしまうところに、『裸川』における青砥の描かれ方の特徴がうかがえる。引用された逸話はいずれも、その教訓性を減殺または無効化され、それに代わって通俗化が施される。原話には書き込まれてあったはずの深い洞察や知恵は覆い隠され、本義とは異なる単純化された解釈が前景にせり出してくる。語り手が見せるそのような曲解は、青砥藤綱の定型化した人物像を記憶する読者に向けた挑発行為と考えられよう。原型としての〈青砥藤綱〉を差異化する語りに読者を巻き込むことで、このあとさらに、西鶴が創造した「智慧の浅瀬を渡る下々」の代表たる架空の人物に、奔放な活躍の場を用意する準備が整ったのである。

三

川中の銭を捜索する模様は、「松明の光に映えて秋の流れは夜の錦と見え、人の足手は、しがらみとなつて瀬々を立ち切るといふ壮観であつた」と、傍線部を西鶴の表現から借用して語られる。〈見立て〉の技法による優美な趣のある情景描写である。「滑川」の逸話にはしばしば、この場面を画題とする挿絵が添えられた。松明を片手に銭を捜す人々に向かって、青砥は橋の上または川岸に立ち、指示を与えている。青砥自身も松明を持つ絵が多い。「ここなめりかしこなめりと青砥下知」（『誹風柳多留』九七篇二四丁）と古川柳にも詠まれたように、ただ傍観するのではなく、銭のありかの見当をつけては、そこを捜すよう陣頭指揮を執る青砥の姿が想像されたのだろう。「なめり」にはもちろん「滑川」が言い掛けられている。

それ、そこだ、いや、もつと右、いや、いや、もつと左、つつこめ、などと声をからして青砥は下知するものの、暗さは暗し、落した場所もどこであつたか青砥自身にさへ心細い有様で、たとへ地を裂き、地軸を破り、龍宮までもと青砥ひとりは足ずりしてあせつてゐても、人足たちの指先には一文の銭も当らず、川風寒く皮膚を刺して、人足すべて凍え死なんばかりに苦しみ、やうやうあちこちから不平の呟き声が起つて来た。何の因果で、このやうな難儀に遭ふか、と水底をさぐりながら、めそめそ泣き出す人足まで出て来たのである。

語り手は青砥の「下知」をまたしても冷然と見つめている。冒頭の癇癪に近い「下知」は青砥の我執の深さを映し出し、「夜の錦」や「しがらみ」の典雅な見立てを遙かかなたに追い遣る。「声をからして」捜索を命じ、「青砥ひとりは足ずりしてあせつてゐても」、現場の徒労感は募るばかりであった。「人足たち」に苛酷な作業を強いながら、「青砥は岸に焚火して赤鬼の如く顔をほてらし、眼をむいて人足どもを監視し、それ左、それ右、とわめき散らす」。そこにはもはや、「仁愛深き」「天下の賢者」の面影はない。

『武家義理物語』の語り手が「一銭も手にあたらずして、難儀する事しばらくなり」と簡明に述べた状況を敷衍して、『裸川』では「人足たち」の肉声まで拾い、「川風寒く皮膚を刺」す現場で起きていたことの実相を活写する。その手法の特徴は、「難儀」に言及した西鶴の表現にも萌芽が見られた〈うがち〉

の趣向をさらに徹底させることにあった。〈うがち〉とは、既成の認識を攪乱する仮想事実の提示であり、重厚な理念の世界を茶化す、余計だが機知に富む言葉にほかならない。[18] こうして盤石の定型を持つはずの「滑川」の逸話が、これまで語られることのなかった仮想事実の発覚によって翻弄され、異化される。

この時、人足の中に浅田小五郎といふ三十四、五歳のばくち打がゐた。人間、三十四、五の頃は最も自惚れの強いものださうであるが、それでなくともこの浅田は、氏育ち少しくまされるを鼻にかけ、いまは落ちぶれて人足仲間にはひつてゐても、傲岸不遜にして長上をあなどり、仕事をなまけ、いさかの奇智を弄して悪銭を得ては、若年の者どもに酒をふるまひ、兄貴は気前がよいと言はれて、さうでもないが、と答へてまんざらでもないやうな大馬鹿者のひとりであつた。

『我物ゆゑに裸川』では「ひとりの人足」または「物の才覚らしき男」と書かれる人物に、太宰は「浅田小五郎」という名を与えた。その名はこの男が「智慧の浅瀬を渡る」「小人」であることを示唆するのだろう。「悪銭」を投げ出して「若年の者どもに酒をふるま」うことが浅田の自己顕示欲を満たすための手段だった。滑川に落とした「十一文」にこだわる青砥と自己像を維持するために「奇智を弄して悪銭を得」る浅田とは、金銭という課題を共有していることにはなる。しかし、両者の間には、青砥が貨幣というものの本質を問うのに対して、浅田は銭の多寡を問題にするという懸隔がある。そこには、本来の「滑川」伝説ではふれられることのない、金銭の質と量とのどちらにより重い価値を認めるか、という問いが浮上している。

過大な自己肯定感に浸り、気前のよさを誇りとする「大馬鹿者」の浅田には、青砥の大仰な「下知」の背後にある、貨幣を貴重な社会資本と見なす理念など眼中にはない。[19]「たかが十文か十一文」のことで「血相かへて騒」いでいる青砥が「どうにも、うるさくてかなはない」のである。一方の青砥も、「人足すべて凍え死なんばかりに苦し」む有様をよそに、ひたすら「国土の重宝」が甦ることを願い、居丈高な「下知」を繰り返すばかりであった。『裸川』における青砥の言動は終始、理と情とのバランスを著しく欠いている。「滑川」の逸話から導き出されるはずの理念は、それにふさわしい提唱者を失ったのである。

「人足たち」がつらい作業を強いられているなかで、浅田は得意の「奇智」をはたらかせる。自分の腹掛けから取り出した銭を川中から捜し出したかのように見せかけて、青砥を欺いたのである。『武家義理物語』では「此方の銭を手まはしして」とだけ書かれた詐術をここでは具体的に叙述している。

「なに、あつた？　銭はあつたか。」岸では青砥が浅田の叫びを聞いて狂喜し、「銭はあつたか。たしかに、あつたか。」と脊伸びしてくどく尋ねた。

浅田は、ばかばかしい思ひで、

「へえ、ございました。三文ございました。おとどけ致します。」と言つて岸に向つて歩きかけたら、青砥は声をはげまし、

「動くな、動くな。その場を捜せ。たしかにそこだ。私はその場に落したのだ。いま思ひ出した。たしかにそこだ。さらに八文ある筈だ。落したものは、落した場所にあるにきまつてゐる。それ！　皆の者、銭は三文見つかつたぞ。さらに精出して、そこな下郎の周囲を捜せ。」とたいへんな騒ぎ方である。

青砥の反応はやはり尋常ではない。「狂喜」するのはまだよいとしても、「銭はあつたか」と「脊伸びしてくどく尋ね」、落とした場所を「いま思ひ出した。たしかにそこだ」といい加減な断定まで加えてしまうのは、明らかに「三枚目」が演じる軽挙である。その空騒ぎはこのあとも、「『なに、あつたか。』と打てば響く青砥の蛮声」、「『それ！　皆の者、そこな下郎は殊勝であるぞ。負けず劣らず、はげめ、つつこめ。』と体を震はせて更にはげしく下知するのである」と激化していく。こうした常軌を逸した感情の暴走を見せる〈青砥藤綱〉は、文芸史上ついぞ現れたことがなかったであろう。

『裸川』が「滑川」を舞台に「青砥左衛門尉藤綱」を登場させたとき、読者は必然的に既知の筋立てを見通しとして持つことになる。したがって、『太平記』や『北条九代記』などの記事を敷き写した教訓集によって〈青砥藤綱〉を知っていた読者は、『裸川』の青砥に戸惑うほかなかったものと考えられる。これまでも検証してきたように、太宰による創作のめあては一貫して、その読者の見通しを裏切ることにあった。北条時頼から、「学道を勤めて、仁義を修め廉恥を行ひ、奉公に私なく行跡に非なし」と評され、「他人には替りて貴き人」[20]として遇されたという「青砥左衛門尉藤綱」を、これほどまでに不完全

な、そしてそれゆえに身近な人物として描くことの彼方には、「滑川」の逸話が持つ潜在的な型の強度を利用して、そこからの離脱によって新たな小説の言葉のおもしろさを創造することが遠望されていたのではなかろうか。

岸の青砥は喜ぶ事かぎりなく、浅田から受け取つた十一文を三度も勘定し直して、うむ、たしかに十一文、と深く首肯き、火打袋にちやりんとをさめて、にやりと笑ひ、

「さて、浅田とやら、このたびの働きは、見事であつたなう。そちのお蔭で国土の重宝はよみがへつた。さらに一両の褒美をとらせる。川に落ちた銭は、いたづらに朽ちるばかりであるが、人の手から手へ渡つた金は、いつまでも生きて世にとどまりて人のまはり持ち。」としんみり言つて、一両の褒美をつかはし、ひらりと馬に乗り、戞々と立ち去つたが、人足たちは後を見送り、馬鹿な人だと言つた。智慧の浅瀬を渡る下々の心には、青砥の深慮が解しかね、一文惜しみの百知らず、と笑ひののしつたとは、いつの世も小人はあさましく、救ひ難いものである。

信念に基づいて「国土の重宝」を守り抜いた自分の行いの正しさに青砥は陶酔する。だが、「深く首肯き」、「にやりと笑ひ」、「しんみり言つて」、「ひらりと馬に乗り、戞々と立ち去つた」と、語り手は悦に入る青砥のしぐさを逐一見逃さない。その執拗な描写に含まれるいやみは、青砥の喜び様を「智慧の浅瀬を渡る下々の心」で捉えるところに生成する。青砥による「下知」の描写でもそうであったように、「小人」の浅ましさを一応は嘆いてみせる語り手自身が「下々の心」を代弁しているのである。したがって、その語り手が言挙げする「青砥の深慮」の価値は自ずと下落せざるを得ない。

そもそも、「深慮」とは程遠い激情に駆られた青砥の言動を、語り手は追い続けてきた。教訓には不可欠な賢者と愚者との絶対的な差異という前提が『裸川』においては曖昧なままなのである。[21] これでは、青砥の説諭は機能しない。周囲の無理解を悟ることなく、芝居がかった口調で得々と理を説くことの愚かしさ、おかしさは、帰宅後に同様の説教を始める場面でも繰り返し描かれる。「女房子供を一室に集めて」、「河原で人足どもに言ひ聞かせた教訓を、再びい気持で繰り返して説いた」ものの、「一座の者はもぢもぢして、ただあいまいに首肯」するばかりであった。日頃から、分別顔で道を説く青砥に「女房子供」は辟易としているのかもしれない。両者の熱意の差が〈茶利場〉を形作る。

四

一方、青砥を欺いた浅田は、その晩の「贅沢な大宴会」の開催にあたって、「れいの気前のよいところを見せて褒美の一両をあつさりと皆に寄付した」。

浅田は何といつても一座の花形である。兄貴のおかげで今宵の極楽、と言はれて浅田、よせばよいのに、

「されば さ、あの青砥はとんだ間抜けだ。おれの腹掛けから取り出した銭とも知らないで。」と口をまげてせせら笑つた。一座あつと驚き、膝を打ち、さすがは兄貴の発明おそれいつた、世が世ならお前は青砥の上にも立つべき器量人だ、とあさはかなお世辞を言ひ、酒宴は一そう派手に物狂はしくなつて行くばかりであつたが、真面目な人はどこにでもゐる。突如、宴席の片隅から、浅田の馬鹿野郎！　といふ怒号が起つた。

『武家義理物語』では、「左衛門程、世に賢き者を偽りすましける」と「物の才覚らしき男」が自慢したことになっている。騙された相手が「世に賢き者」だからこそ、騙した自分の賢さを誇ることができる、という手前勝手な理屈である。しかし、同じ詐術を弄した相手でも、「あの青砥はとんだ間抜けだ」と「せせら笑」う浅田にとって、青砥の「賢才」は自明のことではなかった。「引付衆」という職にあるひとりの「貧乏役人」にすぎなかったのである。したがって、浅田の屈折した優越感は「世に賢き者」にではなく、「引付衆」という権力の行使の仕方に対するものだったことになるだろう。浅田にしてみれば、銭を川中に落としたという自らの過失を棚に上げ、冷たい水に手足を晒す「人足たち」に「はげしく下知する」青砥への意趣返しを果たしたまでのことであった。ここにも、西鶴の表現を異化しようとする創作意図は明白である。

『裸川』の語り手は、そのような浅田の浮ついた自画自賛に「よせばよいのに」と批評を加える。『我物ゆゑに裸川』の書き出し、「口の虎身を喰（はみ）、舌の剣（つるぎ）命を断つは、人の本情（ほんじやう）にあらず」をふまえ、浅田の不用意な一言がもたらす身の破滅を予示しているのだろう。冷笑的な語りはすべての登場人物との距離

を保ち、特定の理念や感情への共鳴を回避することで、この小説が教訓譚や主情的な物語に一元化することを許さない。

浅田の言葉に激怒する「真面目な人」は、『我物ゆゑに裸川』では「千馬孫九郎」という二代前までは「歴々の武士」だった者として紹介され、最後には、時頼への青砥の「言上」で「二たび武家のほまれ」を賜ることになる。しかし、「浅田小五郎」とは対照的に、「千馬孫九郎」は『裸川』においてはその名を記されることなく、「小さい男」と呼ばれる。「侍のこころざし」の見事さを主題とする『武家義理物語』と「智慧の浅瀬を渡る下々の心」が優位に立つ『裸川』との違いは、このような書き換えからも確かめられよう。

語り手による批評は「小さい男」の言動にも向けられる。「青砥のせつかくの高潔な志」を踏みにじった浅田の「無智な小細工」をなじり、「けふよりのちは赤の他人と思つていただきたい」と「人足たち」との絶縁を宣言した後、「小さい男」は「親孝行」の尊さを語りはじめる。

おれは、これから親孝行をするんだ。笑つちやいけねえ。おれは、こんな世の中のあさましい実相を見ると、なぜだか、ふつと親孝行をしたくなつて来るのだ。これまでも、ちよいちよいそんな事はあつたが、もうもう、けふといふけふは、あいそが尽きた。さつぱりと足を洗つて、親孝行をするんだ。人間は親に孝行しなければ、犬畜生と同じわけのものになるんだ。笑つちやいけねえ。父上、母上、けふまでの不孝の罪はゆるして下さい。」などと、議論は意外のところまで発展して、さうしてその小男は声を放つて泣いて、泣きながら家へ帰り、翌る朝は未明に起き柴刈り縄なひ草鞋を作り両親の手助けをして、あつぱれ孝子の誉れを得て、時頼公に召出され、めでたく家運隆昌に向つたといふ、これは後の話。

浅田とその取り巻きのやりとりを聞き、あらためて「世の中のあさましい実相」を目の当たりにした「小男」は、「けふまでの不孝の罪」の重さに気づき、心を入れ替えて「親孝行」に努めることを決意する。周囲の者にとっては唐突な「親孝行」の連発に、語り手は「議論は意外のところまで発展して」と、からかいの片言を差し挟む。「親孝行」という美徳そのものを批判するのではなく、「小男」の心のなかに覚醒した信念とそれが語られる文脈との不協和を揶揄しているのである。

西鶴の筋立てにはなかった仕掛けによって、「浅田の狡智」は発覚する。落とした銭は十一文ではなく九文であることが、青砥の「悧発さうな八つの娘」の問いかけでわかったのである。出仕の途中、二文を娘に手渡したことを忘れていた青砥は、火打袋の残金を確かめた際、その分を勘定に入れず、落とした銭は十一文と早合点していたのだった。

青砥は愕然とした。落した銭は九文でなければならぬ筈であつた。九文落して、十一文川底から出て来るとは、奇怪である。青砥だつて馬鹿ではない。ひよつとしたら、これはあの浅田とやらいふのつぺりした顔の人足が、何かたくらんだのかも知れぬ、と感附いた。考へてみると、手でさぐるよりも足でさぐつたはうが早く見つかるなどといふのもふざけた話だ。とにかく明朝、あの浅田とやらいふ人足を役所に呼び出し、きびしく糺明してやらうと、頗る面白くない気持でその夜は寝た。

川中に銭を落としたことに続く青砥の失態である。語られてはいない「女房子供」の反応を想像するとき、その粗忽さが笑い事で済まされないことは明らかだろう。むしろ真に「愕然と」するのは「女房子供」の方かもしれない。そもそも、十一文という金額を「人足たち」に伝えたのは青砥だった。だが、失策への反省よりも、浅田に対する嫌疑が募るとともに、欺かれたことへの悔しさに青砥は包まれる。二度にわたる「得意満面」の説教が無駄になったことも、青砥を「頗る面白くない気持」にさせる。

「あの浅田とやらいふのつぺりした顔の人足」のことを「女房子供」に「ひとりの発明らしき顔をした人足」と語っていたのも青砥だった。他人の人品を見損なうことの恥ずかしさも忘れ、青砥はあくまでも被害者の立場で浅田の罪を裁こうとしはじめている。これまでこの小説のなかで反復されてきた、〈青砥藤綱〉からの乖離という創作方法は、ここに極まった感がある。「青砥だつて馬鹿ではない」という語りは、賢者・青砥藤綱の不在を宣言するのである。

おわりに

『裸川』の青砥は、浅田に対して「下役人の厳重な監視のもとに丸裸となつ

て川を捜」すよう命じる。それが「お上をいつはる不届者」に下した刑罰としての労役であった。「滑川もいつしか人に裸川と呼ばれて鎌倉名物の一つに数へ上げられるやうになつた頃、すなはち九十七日目に」、銭九文の捜索は終わり、浅田は「青砥と再び対面」する。

「下郎、思ひ知つたか。」

と言はれて浅田は、おそるるところなく、かうべを挙げて、

「せんだつて、あなたに差し上げた銭十一文は、私の腹掛けから取り出したものでございますから、あれは私に返して下さい。」と言つたとやら、ひかれ者の小唄とはこれであらうかと、のちのち人の笑ひ話の種になつた。

刑場に引かれていく罪人が小唄を口ずさみ、負け惜しみから強がって見せる。そのような「ひかれ者の小唄」にたとえられた浅田の要求は、[22]労役刑の執行によっても「不届者」に改悛の情を起こさせることができなかったという意味で、青砥による裁きの実効性を相対化する。『青砥稿花紅彩画』で、「天下の賢者と呼ばれたる藤綱殿故のぞむところ、手向ひいたさぬ縄かけよ」と日本駄右衛門に言わしめた、名奉行の誉れ高い〈青砥藤綱〉は、そこにはいないのだ。

『武家義理物語』の『我物ゆゑに裸川』は、青砥藤綱をめぐる逸話の型に他の要素を持ち込み、自らの発言がもとで責任を取らされることになった男を描いて、裁きの見事さをも表象した作品である。倹約の美徳を教示する「滑川」の逸話と、奸智がもたらす悪事を懲らしめる「政談」とを融合させた、正統的な〈青砥藤綱〉の物語となり得ている。西鶴は謹厳にして冷静な賢者・青砥の形象を保持した。さらに、北条時頼の政務を補佐する重臣としての働きにも言及して、『太平記』以降語られてきた、理を重んじ、主君への諫言をも厭わぬ清廉公平な家臣の姿を逸脱することなく、武門ならではのこころばえに焦点を当てる。巻頭の「見出し」にあった「夜のたいまつは心の光」は、世の中の鑑となる青砥の威光を表す。

また、「物の才覚らしき男」に騙されたという西鶴による趣向も、南方熊楠が指摘したように、『孟子』巻第九「万章章句 下」に載る、春秋時代、鄭の名宰相・子産が池守の役人である「校人（みち）」に欺かれた逸話を下敷きに書かれたとすれば、[23]「君子を欺くに其の方を以てすべき」[24]例話と考えることができる。「君子」といえども「道理にかなった方法でなら、だまされもする」[25]のだから、子産の場合と同様に、青砥の落ち度とばかりはいえないことになる。

それに対して『裸川』は、『我物ゆゑに裸川』に触発されたとはいえ、〈青砥藤綱〉の物語を借りて〈笑い〉を追求する滑稽小説として書き換えられた。本義を知りながらも、意図的にそこから遊離することから生まれる笑いが『裸川』の魅力である。本質の陰にあるかもしれない意外な現実が〈うがち〉の手法によって浮かび上がり、教訓性が高い〈青砥・滑川〉の逸話は異化される。決めぜりふとなるはずの青砥の言葉は効力を失い、そのため、小説世界は円満に落着することはない。これらの逸話が広く知られていた時代にあっては、読者は原型としての〈青砥藤綱〉との偏差を存分に楽しむことができたであろう。

司馬遼太郎は最晩年の紀行文『街道をゆく（四二）三浦半島記』（平成8・6 朝日新聞社）のなかで、青砥藤綱の事蹟を訪ねたときのことを綴っている。

「パリにおけるセーヌ川や、京都での鴨川に強いて位置づければ、鎌倉では滑川である」と書き出した司馬は、「私どものこどものころは、教科書だったかにこの細流での故事が出ていて、川の名も、たいていの子供は知っていた」と振り返る。大正十二（一九二三）年に生まれた司馬遼太郎の幼少期、すなわち昭和初期にはまだ、「滑川」の逸話が世代を超えて語り継がれていたのだろう。その逸話をとおして、青砥藤綱は〈倹約〉の美徳を実践した偉人として記憶されていたものと考えられる。『裸川』が発表された当時、戦費捻出のため、倹約と貯蓄とは国民の務めとされていた。それゆえ、青砥は時局にふさわしい理想人物でもあった。その〈倹約〉の模範たる人物を滑稽小説の主役に引き出した太宰治の反時代性は注目に値する。[26]『新釈諸国噺』という小説集全体、さらには戦時下の太宰が試みたユーモア表象に関わる問題として、稿を改めて論じることとしたい。[27]

現代の読者の多くがそうであるように、〈青砥・滑川〉の逸話について知らなくても、『裸川』における奇矯なまでに居丈高な「引付衆」の自己陶酔と浅田を代表とする「智慧の浅瀬を渡る下々の心」との対峙や饒舌な批評を繰り出す語りは十分な読みどころとなる。また、浅田に倣い「妙な腰つき」で銭を捜し、「松明片手に舞ひ」はじめる「人足たち」、滑川の岸辺で、六、七十年前に落としたかんざしの行方を尋ね、役人に叱られる「心得顔した婆」と滑稽な場面も配置され、この小説には多様な〈笑い〉がちりばめられていた。『裸川』

は江戸期の文芸に多く見られた二重化する読者に対応できる仕掛けを備えた小説であった。太宰治は、奔放な〈うがち〉のはたらきを借りて〈青砥藤綱〉言説の枠組みを崩しつつ、「下々の心」が躍動する滑稽小説を創造したのである。

注

1　津島美知子『回想の太宰治』（昭和53・5　人文書院）

2　太宰治『新釈諸国噺』の本文は『太宰治全集』7（平成10・10　筑摩書房）による。原則として、他の引用文も含め、仮名遣いおよびルビは原文のまま とし、漢字は新字に統一した。文中の傍線・傍点は引用者による。

3　『武家義理物語』の本文は、『西鶴全集』第八（正宗敦夫編纂校訂　昭和3・1　日本古典全集刊行会）による。津島美知子『回想の太宰治』（注1）に「太宰が『新釈諸国噺』を書くときに拠った」書物として紹介されている。

4　兵藤裕己『太平記〈よみ〉の可能性　歴史という物語』（平成7・11　講談社）

5　『日本伝奇伝説大事典』（昭和61・10　角川書店　「青砥藤綱」の項目の執筆者は木越治）

6　『太平記』巻第三十五。『太平記』の本文は、有朋堂文庫『太平記』下（昭和4・9　有朋堂書店）による。

7　寺西朋子「太宰治『新釈諸国噺』出典考」（「近代文学試論」11　昭和48・6）は、戯画化にあたって『太平記』の記事が援用されたことを指摘する。

8　木村小夜『太宰治翻案作品論』（平成13・2　和泉書院）第二章『新釋諸國噺』論第五節「裸川」は、『太平記』から『武家義理物語』を経て『裸川』に至る翻案の過程を丁寧にたどった上で、青砥と浅田との対立という読解の構図を脱構築した、示唆に富む論考である。

9　西川如見『町人嚢　百姓嚢　長崎夜話草』（飯島忠夫・西川忠幸校訂　昭和17・6　岩波文庫）

10　室鳩巣『駿台雑話』（森銑三校訂　昭和11・12　岩波文庫）

11　石田梅岩『都鄙問答』（足立栗園校訂　昭和10・2　岩波文庫）

12　曲亭馬琴著・葛飾北斎画『青砥藤綱摸稜案』（大正5・7　絵入文庫刊行会）

13　黙阿弥『弁天小僧・鳩の平右衛門』（河竹繁俊校訂　昭和3・8　岩波文庫）

14　池内輝雄は「『裸川』論――メディアとの相関――」（「太宰治研究」11　平成15・6）で、同時代のコンテクストを視野に入れ、「ひどい決意」は「かすかに戦時の国家体制を諷しているように見てとれる」と論じる。

15　『徒然草』の本文は、『新訂　徒然草』（西尾実・安良岡康作校注　昭和60・1　岩波文庫）による。

16　『北条九代記』の本文は、有朋堂文庫『保元物語　平治物語　北条九代記』（昭和2・9　有朋堂書店）による。

17　高橋慎一朗『北条時頼』（平成25・8　吉川弘文館）には、青砥藤綱にまつわる記述はない。歴史研究の立場から発せられた、〈時頼・青砥〉伝説への誠実な応答である。

18　水野稔は『黄表紙・洒落本の世界』（昭和51・12　岩波新書）で、「人間社会の隠された裏面・様相もしくは欠陥と見なされるもの」を「指摘・剔出する」こと、と「うがち」を解説している。

19　三上隆三「青砥藤綱と貨幣経済の夜明け」（「歴史読本」48-8　平成15・8）は経済史学の見地から「滑川」の逸話に見られる青砥の「マクロ（巨視的）思考」を高く評価する。

20　『北条九代記』（注16に同じ）

21　鳥居邦朗「太宰治と西鶴――「裸川」を中心に――」（「比較文化」16　昭和45・3）はこの平準化を「青砥は浅田と同じ位置にまで引きずりおろされ、その「清廉潔白」がすなわち戯画の対象となっている」と読み解く。

22　小泉浩一郎「『新釈諸国噺』論――「大力」「裸川」「義理」をめぐり――」（「日本文学」25-1　昭和51・1）はこの応答に「権力に屈しない浅田の逞しい合理主義と、抵抗の精神」を見る。

23　南方熊楠「『武家義理物語』私註」（「月刊日本及日本人」273　昭和8・5）

24　『孟子』下（小林勝人訳注　昭和45・6　岩波文庫）

25　『孟子』下（注24に同じ）

26　江明瑾「過剰化された人間性の物語―太宰治「裸川」論」（「文化」75-3・4　平成24）は〈倹素〉という戦時下の青砥藤綱像からの逸脱を跡づける。

27　斎藤理生『太宰治の小説の〈笑い〉』（平成25・5　双文社出版）における諸論文は、この問題について数多くの豊かで刺激的な視座を提示している。

本研究はＪＳＰＳ科研費 23652057（挑戦的萌芽研究）の助成を受けたものである。